

ふるさと彩生 シバザクラが咲いてみんな元気になった！

農村振興 2017-6 vol.810 全国農村振興技術連盟 抜粋



いのうえ まさゆき
井上 正幸 (山口県周南市)
向道環境保全会 代表
おおどりまわく さと
大道理夢求の里交流館 館長
百笑倶楽部 顧問



1. 地域の概要

私たちの地域は、山口県の中央部に位置する周南市北部にあり標高 400m の山々に囲まれた典型的な中山間地域です。ここに、13 集落、200 世帯、約 400 人が暮らしています。平成 7 年度に、山口県の棚田 20 選にも認定されている急傾斜の棚田地帯の 1 集落において、農作業の効率化を目指してほ場整備事業を実施しました。

しかしながら、ほとんどの農地は未整備田であり、高齢化（高齢化率 53%）や後継者不足により、荒廃や有害鳥獣被害が拡大している現状です。

このような状況の中、ほ場整備事業が完了した法面を活用し芝桜の植付けを実施しました。今では、1 シーズンに県内外から 5 万人を超える見学者が訪ずれ都市住民との交流をきっかけに、地域住民の意識が急速に変化してきたところです。

2. 取り組みの発端（はじまり）

ほ場整備事業の完了にともない営農は大変に効率的になりましたが、棚田整備のため法面が高いところでは 9m もあり長大となった結果、高齢者にとって急傾斜面での草刈りは危険かつ重労働な過酷な作業となりました。

この草刈り作業の省力化について、6 戸の関係農家で協議を重ねた結果、防草シートの布設を思いつき、あわせて景観形成を維持するために芝桜の植栽をするということで全員の合意形成ができました。



3. 取り組みへの実践

平成 19 年度において、この 6 戸の関係農家で任意組織「百笑倶楽部」を結成しました。

最初の大きな課題は、防草シート等を含む資材経費をどのようにして捻出するかということでした。各農家の所有する農地法面積には差異があるため、再三の協議を重ねた結果、最終的に各自の法面に係る経費は自己負担で賄うことと決定しました。

このときに、重要な役割を果たしてくれたのが、農地・水・環境保全向上対策交付金です。基本的に補助金に頼らず「自分たちの農地は自分たちで守る！」という考えでしたが、この交付金の一部を資材購入に充当することができたことは、幸いでした。

その後、大変な労力と時間を要する棚田法面への防草シート設置作業においては、地域内の住民に限らず都市部のボランティアの人々の協力を得て、平成 20 年度から 3 年計画で 1 万㎡に布設し、同時に 10 万本の芝桜を植栽することができました。



4. 静かな谷間に新たな芽ぶき

取組みの当初は、地域内住民も冷ややかな目で見ていたようですが、山奥の集落にもかかわらず開花時期になると県内外から多くの見学者が訪れるようになり、地域連帯の機運が高まったことで、全戸加入のコミュニティ組織「大道理をよくする会」を発足させ、高齢者にやさしい地域づくりを目指した「夢プラン」を策定したところです。

更に地域に密着した地域活動を展開させようと、周南市から指定管理制度を受けて新たな地域拠点として「夢求の里交流館」を設立しました。

- ① お年寄りの賑わい場である「高齢者サロン」の開催。
- ② 庭先の剪定や電球の取換作業等をおこなう「便利屋事業」。
- ③ 通院や買物の送迎を手助けする交通手段「もやい便」の運行。
- ④ 移住を希望される人へ空家を紹介する「里の案内人制度」
- ⑤ 地域内で収穫された野菜などを食材とした弁当づくりや高齢者への配食事業等さまざまな活動に発展してきたところです。

特に、地元の主婦 17 名が農産物加工グループ「ほたる工房」を設立し、芝桜にちなんだ満開弁当の販売や配食は多くの方から好評をいただいています。

また、芝桜の植栽デザインや満開弁当のパッケージデザインは、市内にある YIC キャリアデザイン専門学校の学生たちに依頼して、若者のアイデアを取り入れてきました。

こうした学校教育との連携から、平成 28 年 4 月よりプロの漫画家志望のデザイン学校の卒業生 7 名（男性 4 名女性 3 名）が地域内の 3 軒の空家へ移住してきて、漫画制作活動や地域活動に勤しんでいます。

5. これからの取り組みは！

先に述べたように、1 集落 6 名で始めたことが今では「芝桜の里」に発展し定着したことは、取り組み当初は全く考えられないことでありました。

ただ夏時期の過酷な草刈作業から逃れたい気持ちから、想いを馳せたことが今ではゴールデンウィークシーズンに約 5 万人が訪れる観光名所になりました。その大きな要因のひとつは、多面的機能支払交付金への取組であったと言っても過言ではありません。

多面的機能支払交付金は、農地を守るものだけのものではありません。このような「新しいコミュニティづくり」に繋げるものだと考えます。

最後に、今後の大きな課題は後継者の確保ですが、都市部の人たちや若者と交流を深める中で農業・農村に興味をもっている人が意外と多いということに気づきました。

次世代にうまく引き継いでいくことは、現在、活動している私達の責務であると強く感じているところです。

